

他方、「終活なんておやめなさい。」と仏教思想家であるひろさちや氏はこのように述べる。

団塊の世代が70歳になるまであと二年といった短い月日を迎え、多くの大人たちは自己の遺産、遺言、お墓探しなどにおいて不安を抱いている。

ひろ氏は、仏教を中心とした宗教の本書を400冊以上と書いてきた思想家だ。彼は、老後の不安、お金の心配、人間関係の在り方、理想な社会像とは何か、ということに言及してきた。その中で深く印象に残る主張は、「終活をするなんてばかばかしい」ということだ。近年、目立ってきている動きなのにもかかわらず、なぜこれに疑問を呈するのか。

彼は、予測がつかない未来のための事前準備は不必要と考える。つまり、人間は、亡くなったあとの人生は全て神や未来に任せるべきであり、今から遺言書を書き、遺産整理をするのは無意味だと主張する。

「今を楽しめば良い」と自己のモットーに日々心がけている彼は、毎日自分の好きなように生きているため、楽しいことしかないと話す。原稿を書き、自分の趣味に時間を費やすそんな毎日にストレスを感じたことがないようである。そんな彼から見ると、現在の日本社会は、正気の沙汰ではないのだ。将来、裕福になるためお金を稼ぐ手段として仕事に没頭し、分刻みのスケジュールに日々圧倒されている大人たちはどうしたのかと。江戸時代に生きていた人々は、お金持ちではなかったが、毎日の労働時間は4、5時間であり、時間に余裕があったため、自分の好きなような暮らしを送っていた。ひろ氏は、この生活を裕福と定義している。